学生による企画展の報告「交談―金大今昔国際交流ばなし―」

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OKANO Yurika, SATO Riku, TAKAKUWA Keiju, TOMAI Kenta, NAKADA Akira, HARADA Itsuki, MATSUNAGA Atsushi, KAWAI Nozomu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002000655

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

学生による企画展の報告
「交談―金大今昔国際交流ばなし―」

A Report of the Special Exhibition
by Students at Kanazawa University Museum in 2022,
“KODAN - A Narrative History of International Exchange at
Kanazawa University -”

岡野　有里香(1)、佐藤　理玖(2)、髙桑　景寿(3)、笘居　研太(4)
中田　暁(5)、原田　樹(6)、松永　篤知(7)、河合　望(8)

OKANO Yurika, SATO Riku, TAKAKUWA Keiju, TOMAI Kenta,
NAKADA Akira, HARADA Itsuki, MATSUNAGA Atsushi, KAWAI Nozomu

(1) 前田土佐守家資料館／金沢大学大学院　人間社会環境研究科　人文学専攻　博士前期課程
Maeda Tosanokami-ke Family Museum/Master’s Course, Division of Humanities,
Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University
(2) 早稲田大学大学院　文学研究科　美術史学専攻　博士前期課程
Master’s Course, Department of the History of Art, Graduate School of Letters,
Arts and Sciences, Waseda University
(3) 金沢大学大学院　人間社会環境研究科　人文学専攻　博士前期課程
Master’s Course, Division of Humanities, Graduate School of Human and
Socio-Environmental Studies, Kanazawa University
(4) 大阪公立大学大学院　文学研究科　哲学歴史学専攻　博士前期課程
Master’s Course, Department of Philosophy and History,
Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka Metropolitan University
(5) 金沢大学大学院　人間社会環境研究科　人文学専攻　博士前期課程
Master’s Course, Division of Humanities, Graduate School of Human and
Socio-Environmental Studies, Kanazawa University
(6) 金沢大学大学院　人間社会環境研究科　人文学専攻　博士前期課程
Master’s Course, Division of Humanities, Graduate School of Human and
Socio-Environmental Studies, Kanazawa University
(7) 金沢大学資料館
Kanazawa University Museum, Kanazawa University
(8) 金沢大学　新学術創成研究機構　金沢大学資料館教育・展示部門長
Institute for the Frontier Science Initiative and Kanazawa University Museum, Kanazawa University

Abstract

This article reports and evaluates the exhibition “KODAN - A Narrative History of International Exchange at Kanazawa University -” (November 14, 2022 - January 18, 2023) held by students at Kanazawa University Museum in 2022. This exhibition was part of the “Practice of Museology,” a course for museum curator qualification, and the students took the initiative in deciding on the concept, selecting materials, designing, and displaying the exhibition. The exhibition’s theme was the overseas exchanges conducted by Kanazawa University and its predecessors. It was divided into three major sections from the Meiji period to the present, tracing the changes in these exchanges along with materials showing the characteristics of the exchanges in each period.

We divided the students into three groups: the Material and Caption Group, the Design Group, and the Exhibition Group, each of which had a different role, and they proceeded by exchanging information. This report will therefore also focus on the work of these three groups and describe the flow and evaluation of the exhibition up to its completion. In addition, we carried out a museum tour conducted as an educational outreach activity to provide an overview of the entire process. The authors are the six students who took the museum training course and two faculty members who oversaw the training course.

1. はじめに ー博物館実習と学生による企画展

金沢大学では2014年度以来、博物館学芸員資格履修科目の「博物館実習」の授業の一環として学生による企画展を開催してきた。文部科学省による博物館実習ガイドライン（2009年度版）では2単位相当の学内実習および1単位相当の館園実習が推奨されている[1]。開始当初の学生企画展は、学内実習の一部として位置づけられ、館園実習は学外の博物館・美術館で行われていた。その後、金沢大学資料館が2016年4月に北陸地方の大学で初めて博物館相当施設に指定され[2]、学生企画展の内容も館園実習の内容に匹敵することから、金沢大学資料館の協力で2019年度より学生企画展の実施を以て館園実習を行ったことになると認定された。

金沢大学資料館は、1989年の開館より学芸員養成課程への協力と連携を行ってきた[3]。学生による企画展が開催されたのは2014年度の「植物図「館」」が最初である[4]。この展示は、自然豊かな角間キャンパスにちなんで植物をテーマとしたものであった。以降、翌2015年度には「寒潮事件」と恋愛に着目した「破かれた恋愛小説～『寒潮』に翻弄された四高生」[5]、2016年度には本学が所蔵する物理実験機器を紹介した「ハカリモノ―文系学生が紹介する科学実験機器―」[6]、2017年度には北溟寮閉鎖を承けて100年以上に及ぶ本学学生寮の歴史・伝統を紹介した「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」[7]、2018年度には金沢大学資料館所蔵資料の「数奇な」来歴にスポットライトを当てた「物録（モノローグ）ー資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」[8]、2019年度には赤・青・金の3色に分けた資料について彩色技術や原材料などを紹介することを目的とした「いろは―多彩な技術から見る色の世界―」[9]、2020年度には草野写真コレクションと医学部記念館所蔵資料を通して医学類の前身校（金沢医学館・金沢医学専門学校・金沢医科大学等）の歴史を紹介する「写真で見る前身校PartⅡ～キンダイ医学の源流を辿る～」[10]、2021年度には「光」を多角的な視点で紹介する「光をシコウする」[11]と続いた。

本稿で論じるのは、2022年度開催の9度目の学生企画展「交談―金大今昔国際交流ばなし―」で

ある。2022年度もコロナ禍が続いたが、登学禁止のような強い規制はなかったため、各人がマスク・手洗い・消毒・換気など感染対策を十分したうえで、学生が完全に主体となる対面形式の授業とした。前年度の冬から春にかけてコロナ感染流行第6波、夏に第7波が訪れたが、2022年度学生企画展への大きな影響はなく、コロナ禍前とほとんど変わりない博物館実習となった。

後で実習生が詳述するが、7月までは企画展のアイディアに関する議論と学芸員資格取得に必要な知識・技術の習得と訓練に時間を費やした。4月に学生企画展の概要についての説明、役割分掌の決定、資料館展示室・バックヤードツアーを行い、5月にそれを踏まえた企画案のプレゼンテーションおよびテーマ決定、6月下旬までに企画展の内容と方向性の詳細な議論をして、7月に各班の作業と実技実習を行った。ここで言う役割分掌とは、全体のリーダー・サブリーダーと、資料・キャプション班、デザイン班、展示班の3班および班長のことであり、2020年度に河合がそれまでの班編成を改善したものである。以後上手く機能しているため、2022年度もこの形を踏襲することにした。なお、第2章で反省が述べられている通り、例年よりも議論に時間がかかっていたが、逆にそのおかげで「交談」の企画内容は充実することになったとも言える。時系列や時代背景に合わせた章立てと展示資料は、最終的につながりの良いものとなり、北陸中日新聞の連載記事に紹介されるほど、来館者からの好評にも結びついたからである。

各班の主な作業としては、資料・キャプション班は資料の選定・調査とパネル・キャプションの内容作成、デザイン班はビジュアルイメージも含めたポスター・チラシ・パネル・キャプション等の作成、展示班は什器選定・展示配置等の展示計画を作成した。なお、これらの作業は、夏季休業期間も含めて進められたことを明記しておく。

学生企画展開催まで1か月半を切った10月に入ってから各班の作業は一気に加速し、パネル・キャプション、チラシ・ポスター、展示計画、企画書等が急ピッチで完成していった。そして、11月第2週には学生たちが教員・資料館職員立会いのもと展示室での最終作業をして、翌週月曜日の11月14日に学生企画展「交談」は無事開幕となった。

企画展に伴う教育普及活動については、2020年度・2021年度同様ミュージアムツアーとその動画配信を行うことにした。ミュージアムツアーにあたっては、5つの班を改めて編成した。そして、12月12日～12月16日の昼休みに1回ずつ、計5回のツアーを開催し、その動画を12月下旬に学生自ら編集して年明けに動画投稿サイトYouTubeの金沢大学公式チャンネルにて配信した。これらの取り組みも、博物館における教育普及活動のみならず、動画を用いた発信の仕方を学ぶ良い機会となったと考える。

そして会期終了翌日の1月19日、昨年度はコロナ感染急拡大によって実施することができなかったが、本年度は学生自身による撤収作業も実施することができた。こうして博物館実習および学生企画展は完全なものとなった。

今回の学生企画展もコロナ禍での準備となり、急な予定変更となる可能性もあった中、29名の実習生がそれぞれの役割を全うし、素晴らしい企画展を開催することができたと評価したい。実習生の大半が卒業論文の執筆を抱えていた4年生であり、その中で一通りの学芸員業務を進めた実習生に敬意を表したい。なお本稿では、次の第2章で佐藤と髙桑が学生企画展の流れについて、第3章で岡野が資料調査と展示資料の選定について、第4章で中田が展示室の構成と設営について、第5章で原田が展示に関する制作物について、第6章で笘居が教育普及活動の実施について、それぞれ自身の実体験も踏まえて述べる。そして、末尾の第7章で資料館所属担当教員である松永が結論も兼ねて全体を振り返り、大学附属の資料館で学生による企画展を行う意義について考察する。

最後に、教員として実習に関わる際に留意した点を記したい。一点目として、金沢大学の博物館実習では学生の能動的な活動を確保するためアクティブ・ラーニング方式を採用してきた。2022年度の実習生は29名であり、これを資料・キャプション班、デザイン班、展示班の3班に編成した。毎週の授業では、1限から2限にかけて「議論・作業（約165分）→議論・作業の報告（15分）」というサイクルを繰り返し、学生が主体的に取り組めるよう、教員は各班のアドバイザーや全体のオブザーバーの立場に徹した。この方式に促されて学生の問題解決能力・調査能力・ディスカッション能力はもとより、コミュニケーション能力までもが飛躍的に向上したと思われる。さらに、過去の実習生であった大学院生1名をクラス・ラーニング・アドバイザーとして配置し、当該院生には自らの経験に基づき実習生に懇切丁寧なサポート・アドバイスをしてもらった。

二点目は、班体制と役割分掌を明確化することに意を注いだ。実習生は前述の通り29名3班編成である。各人が担当する業務の進捗は各班長により把握され、各班の議論・作業の進捗は全体リーダーによりマネジメントされる。企画展オープニングまでのタイトなスケジュールが学生の焦りに拍車をかけたことも否めないが、展示までの準備期間を通じて学生の主体性と責任感において著しい成長が見られた。今年度の実習生は昨年度よりも人数が多く、作業量の均等化には限界があったが、リーダー・班長同士は常に連携を心がけており、3つの班は有効に機能していた。

三点目はテクニカルな点である。金沢大学の博物館実習では、これまでにもSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）やクラウド・サービスを活用してきた。今回も特にLINEを活用して、円滑に情報の連絡、共有が進められた。学生の自主的な会議に、SNSが加わることで、学生間の連携が促進・強化されたものと考える。またGoogleドライブのようなクラウド・サービスも有効に活用され、遠隔地にいても文書や図、写真などの各種データを共有しながら作業を進めることができた。これは、コロナ禍においては特に有効な手段であった。

四点目はコロナ禍における博物館展示の工夫である。前述のように2022年度の学生企画展では、ミュージアムツアーの動画配信を行った。これにより、コロナ禍の不安で足を運ぶことを躊躇する学内外の方々にも、広く学生企画展の関心を喚起することができた。また、企画展会場ではソーシャル・ディスタンスと順路を示すフロアマーカーを設置するなど、来館者が密にならないような工夫も見られた。実習生には、コロナ禍のような特殊な状況下における博物館展示の工夫についても学んでいただけたと思う。

金沢大学では博物館実習を受講するには原則として実習以外の博物館関係科目を全て履修していることが条件となっている。そのため、必然的に実習生の大半が4年生になる。実習生は就職活動や教育実習、そして卒業論文という学生生活の大きな山場に直面する。また博物館実習を終えたとしても、学芸員として採用される学生は稀である。こうした忙しさや採用条件の厳しさにもかかわらず、博物館実習で企画展に取り組む意義とは何か。第一に、博物館実習を通じて、学生の学習効果や人格的成長に留まらず、学生生活を通じて何事かを成し遂げたという達成感にある。第二には、博物館実習を通じて博物館学芸員の業務を一通り経験することにより「ミュージアム・リテラシー」とでも呼ぶべきものを身につけた人材を世に送り出すことにあろう。博物館は一般に資料の収集・保存・研究の場と捉えられがちである。しかし、ミュージアム・リテラシーを身につけた人材を輩出することは、将来、博物館が豊かな生涯教育の場として市民生活に根付いていく一助となるのではないかと考えている。本学の博物館実習は、資料館スタッフの献身的なご協力のおかげで、学生企画展を通じて「生きた」実践的博物館実習を提供することができているとも言えよう。

（河合・松永）

2. 学生企画展の流れ

本章では学生企画展「交談―金大今昔国際交流ばなし―」のテーマ・コンセプトの選定と準備作業、企画展開催後の成果について述べる。その中でも特に、企画展のテーマとコンセプトの決定に至る経緯と実習生の活動、実習のスケジュール（表2）について詳述し、展示資料の調査や展示室の構成と展示作業、展示に関する制作物、教育普及活動の実施詳細については次章以降に譲る。

⑴ 学生企画展に向けた班設置

学生企画展に向けて2022年4月から活動を始めた。まず博物館実習の授業で企画展を行う際の注意事項等を実習生全体で確認した後、2021年度の報告書[12]を参照した上で実習生の班分けを行った。班については、①資料調査・キャプションの執筆を担当する資料・キャプション班（以下、資料班）、②展示室の構成計画を担当する展示班、③ポスターやキャプション・パネル等の制作物を担当するデザイン班の3班を設置した。

今期の企画展に携わった実習生は計29名であり、作業量に応じて、資料班14名、展示班7名、デザイン班8名とし、各班に班長を1名置いた。以下、上記3班を「基礎班」とする。加えて全体の進行・指示や資料館職員と教員との連絡を代表して行うリーダー1名とサブリーダー1名に加え、各基礎班の班長達をリーダー班として基礎班と兼任する形で置いた（表1）。11月からはミュージアムツアーのために実習生を各基礎班から人数が均等になるように振り分け、5つの班を新たに設置した。

⑵ 学生企画展のテーマとコンセプト決定に至るまで

学生企画展では金沢大学資料館に収蔵されている資料を用いた展示を行うことになっている。はじめに、4月から5月にかけて各個人が資料館のVirtual Museum Project[13]や学術資料データベース[14]に掲載されている収蔵資料を基に企画案を作成した。次に、これらを持ち寄り、それぞれが所属する基礎班内で話し合いを行った後、班ごとに企画案を1つにまとめた。資料班は人数が多いため2班に分かれて作業を行った。これら各班の企画案について、博物館実習の授業時間にプレゼンテーションの場を設けて、2022年度学生企画展のテーマ選定を行った。資料班からは金沢大学前身校の修学旅行資料や教育関係資料を主軸として金沢と世界の交流に焦点を当てた「世界と金沢のコウ展（交点）」、来歴や名称などがわからない資料に焦点を当てた「謎展」、デザイン班からは資料の物理的な裏や歴史的な背景を見せようと試みる「資料の裏には…？」、展示班からは金沢大学前身校にまつわるギャップのあるものを中心に当時と現在の違いを体感してもらうことを狙いとした「ヘンシン―過去との対話―」の案が挙げられた。各班からのプレゼンテーションを経て、実習生の多数決の結果、資料班から提示された「世界と金沢のコウ展（交点）」を基にタイトルと展示内容を実習生全体で話し合った上で修正を行い、「交談―金大今昔国際交流ばなし―」というテーマに決定した。6月に各班で章立てやコンセプトについて検討を行い、授業時間内に班ごとの意見を発表し議論する形で展示の章立てやコンセプトについて決定した。

今日の世界では、これまでに推し進められていた様々な形での国際交流が、新型コロナウイルスの流行やロシアによるウクライナ侵攻などの世界的な動乱により以前のように行うことができなくなっている。このような変化の局面に直面していることから、過去の金沢大学やその前身校（金沢医科大学・第四高等学校・石川師範学校等）はどのような国際交流を行っていたかを知ることで、

我々はこれからどのように世界と関わるべきなのかを見つめ直していく必要があると考えた。そこで展示コンセプトは、「世界とのつながり」の再認識とした。

また、章立ては実習生間での話し合いによって3章構成とした。最初に、第1章にあたる「壱ノ談 近代化と外国人教師」は金沢大学前身校で教鞭をとった外国人教師に焦点を当て、近代化が進む中の当時の学生と外国人教師の交流について当時の授業資料などを主とした展示とした。次に、第2章にあたる「弐ノ談 戦争とアジアへの目線」は戦前、戦中の金沢大学前身校に通う学生がどのような視点でアジアを見てまわったかについて、満洲や朝鮮半島を回る修学旅行の写真資料の展示を行った。最後に、第3章にあたる「参ノ談 広がる国際交流」は金沢大学がどのような国際交流を行っているか、金沢大学の協定校からの記念品を中心として現代の金沢大学の国際交流についての展示を行うことに決定した。

⑶ 各班の準備活動及び企画展の成果

今年度は感染症対策が以前より緩和され、すべて対面形式での実習を行うことができた。基本的には1つの教室に集合し、各班に分かれて作業や話し合いを進めた。この教室で、授業開始時にはその日に行う作業・話し合いを確認し、終了時には作業・話し合いの進捗状況を報告した。画像編集ソフトなどを使用する場合には、パソコンのある別の部屋で作業を行うこともあった。連絡にはEメールのほかに、LINEも活用した。制作したファイルの共有にはGoogleドライブを利用した。

展示の章立てが決定した後、資料班とデザイン班は、各章の担当に分かれた。前期（第1・2クォーター）の間、各班は以下の作業を行った。資料班はまず章ごとの方向性や展示資料を固め、それから資料調査を行った。展示資料のリストを作成し、展示班と話し合いながら展示内容を作成した。必要に応じて資料実物の調査や写真撮影を行った。デザイン班は企画展のポスター制作に取り掛かった。Adobe Illustratorでデザインを作成するほかに、必要に応じてポスターに使用する写真を撮影した。展示班は、資料班の提示した展示資料を基に、展示室の配置を構想した。資料や什器のサイズを計測し、使用する什器やパネルの種類、数、配置など、具体的な展示方法を考えた。

夏季休業（8月8日～9月30日）の間も、各々作業を進めた。資料班は資料調査を進めるとともに、展示パネルやキャプションの原稿を作成し、夏季休業終盤の9月30日には原稿を提出した。デザイン班は、ポスター案を4つ作成した。展示班は、展示案の問題点をさらに話し合った。

後期（第3クォーター）に入ると、展示内容が具体性を増す。夏季休業中にデザイン班が作成した4つのポスター案に対して意見を出し合い、1つの案に絞り、それをさらに修正していった。このポスターのデザインをもとに、展示するパネルの雛形となるデザインを作成した。また資料班の作成したパネルやキャプションの原稿を、教員や資料館職員が校正し、修正した。それをデザイン班の作成したパネルの雛形に流し込んだ。その間展示班は、確定した展示資料リストをもとに、実際に展示室を見て展示案を検討し、9月27日に展示案を確定させた。またデザイン班と協力してフロアマーカーを作成した。

そして11月7日～11日の間に展示作業を行い、11月14日に企画展が開幕した。また展示作業に並行して、ミュージアムツアーの準備を進めた。後期後半の第4クォーターでは、さらなる調査や原稿作成などの準備を進め、12月12日～16日の5日間にミュージアムツアーを行った。12月28日までに撮影した動画を編集し、YouTubeに公開した。

1月18日に企画展が閉幕し、1月19日の授業にて展示の撤収作業を行った。またそれと並行して報告書を作成した。

表1. 実習生名簿

班		学類・専攻	学年	役職
資料班	1班	人文・歴史文化学	4年	リーダー
		人間社会環境研究科・人文学	M1	班長
		人文・考古学文化資源学	3年	副班長（1班書記）
		人文・日本中国言語文化学	3年	
		人文・歴史文化学	4年	
		人文・フィールド文化学	4年	
		人文・言語文化学	4年	
	2班	人文・考古学文化資源学	3年	
		人文・フィールド文化学	4年	
		人文・考古学文化資源学	3年	2班書記
		人文・歴史文化学	4年	
		人文・考古学文化資源学	3年	
		人文・言語文化学	4年	
		人文・フィールド文化学	4年	
デザイン班		人文・歴史文化学	4年	班長
		生命理工・海洋生物資源	4年	書記
		人文・歴史文化学	4年	
		人文・フィールド文化学	4年	
		人文・フィールド文化学	4年	
		人文・考古学文化資源学	3年	
		人文・フィールド文化学	3年	
		人文・考古学文化資源学	3年	サブリーダー
展示班		人文・フィールド文化学	4年	班長
		人文・フィールド文化学	4年	
		人文・フィールド文化学	4年	
		人文・考古学文化資源学	3年	
		人文・フィールド文化学	4年	
		人文・フィールド文化学	4年	書記
		人文・考古学文化資源学	3年	

表2. 実習日程

学期		月	日	資料班	デザイン班	展示班	リーダー班
前期	Q1	4	7	ガイダンス・役職決め			
			14	各自の企画案を出し合う			各班リーダー選出
			21	企画案の制作			
			28	企画案・コンペ資料の制作			
		5	12	企画案コンペ			第1回リーダー会 今後の方針の検討
			19	コンセプト・章立ての話し合い			
			26				
		6	2	章立て、章ごとの担当者決定 章ごとに資料・文献調査	章ごとの担当者を決定 資料班と合同で調査・話し合い	章立ての話し合い 実作業の確認	
	Q2		16	全体に対し章ごとに資料紹介、展示案（仮）の共有〈デザイン班〉 章ごとに資料・文献調査、展示内容検討			
			23	展示の展望・コンセプト・まとめについて話し合い			
				資料閲覧（第1回）		展示設備、会場の確認とサイズ測定	
			29				第2回リーダー会 各班進捗状況の確認
			30	資料閲覧（第2回）、資料閲覧は、章ごとに随時実行（課外時間、学外（近世資料館・医学部記念館）含む）	各自作成したポスター案の共有	展示資料の測定 （資料・キャプション班と共同）	
		7	7	章ごとに目玉資料決め	ポスター表面のデザインの話し合い	資料班より展示資料リストの共有 展示配置案の構想	
			14	章ごとに章タイトル、展示の筋書きを検討	ポスター表面のデザインの仮決定 Illustratorの使い方の確認		
			21				
			25		ポスターに使用する資料の撮影		
			28	章タイトル決定			
前期	Q2	8	4	資料目録作成（随時更新） 展示イメージ決定・共有（展示資料一覧、展示の流れ、パネル・キャプション枚数など）		展示配置案第1案作成	第3回リーダー会 夏休み期間の予定作業確認
			5		ポスター初版作成		
夏季休業			25			展示班で話し合い、問題点の洗い出し	
					ポスター案（4案）の完成、修正を重ねる キャプション用図版、地図の作成 パネルの作成		
		9	30	パネル・キャプション原稿提出	ポスター案の決議、決定		

学期		月	日	資料班	デザイン班	展示班	リーダー班
後期	Q3	10	2	パネル・キャプション原稿の校正			
			5	修正提出			
			6	パネル・キャプション原稿の読み合わせ			第4回リーダー会 キャプション・パネルの読み合わせ
					他班の意見を取り入れ、ポスター案の修正	展示配置案の話し合い〈全体〉 （資料・キャプション班の展示資料リストや章の流れなど、全て確定後）	
			7	教員によるパネル・キャプション原稿の校正を修正、提出			
			13		ポスター案の決議、決定	展示配置案の話し合い〈全体〉 資料館に什器の使用申請メールを送信 展示配置案改訂版の発表、修正	
			18	修正提出			
			19		キャプション作成開始、校正を待って随時修正		
後期	Q3	10	20	パネル・キャプション原稿を雛形に流し込むパネル・キャプションの修正 （デザイン班と共同）	チラシ完成 キャプション第1稿完成	資料館展示室で資料館職員と打合わせ 資料キャプション班と話し合いさらに展配置示案を修正	
			24		チラシデータ最終確認版を資料館に送信		
			27	教員によるパネル・キャプションの校正	キャプション第2稿完成	展示配置案の最終決定 フロアマーカーの作成 〈デザイン班〉 展示配置案確定	企画書提出
			28	パネル・キャプションの修正	チラシ、ポスターデータ入稿		
		11	1		キャプション第3稿完成		
			7	資料館展示室での展示作業 パネル・キャプション修正・印刷			
			8				
			9				
			10	ミュージアムツアー担当・各回テーマの決定			
			11	資料館展示室での展示作業 パネル・キャプション修正・印刷			
			14	企画展開幕			
			17	資料調査（ミュージアムツアー） デザイン班・展示班の作業エピソードを収集 原稿作成（ミュージアムツアー）			
		12	1	ミュージアムツアー　リハーサル			

学期		月	日	資料班	デザイン班	展示班	リーダー班
後期	Q4	12	12	ミュージアムツアー　第1回			
			13	ミュージアムツアー　第2回			
			14	ミュージアムツアー　第3回			
			15	ミュージアムツアー　第4回			
			16	ミュージアムツアー　第5回			
			～28	ミュージアムツアー動画の編集			
		1	4				博物館だよりの原稿提出
			18	企画展閉幕			
			19	撤収作業 報告書作成			

⑷ 評価

本項では、実習の流れに対する評価を述べる。

今年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症が流行する中での実習となった。しかし今年度は、感染症対策が昨年度や一昨年度に比べてかなり緩和された。マスク着用の推奨や密集を避ける工夫など、制限が全くないわけではなかったが、1年を通して対面で実習を進めることができた。実習の環境としては感染症流行前とほとんど同じであり、対面での話し合いを進めることができたことは幸運であった。

しかし序盤（4～6月）は話し合いがまとまらず、明らかに遅れ気味であった。実習当初の予定では、5月中に企画展の内容とテーマを決定し、各班の作業に移る予定であった。しかし実際に展示の方向性が決定し、各班の作業に移ったのは6月23日であった。感染症流行直前である2019年度の実習は5月23日には各班の作業を始めており[15]、例年に比べても遅い進行であったと評価される。企画展の内容や方向性は十分に議論されるべきものではあるが、ここに時間をかけすぎたことは反省すべきである。なおその後は各自の迅速な作業により、例年とそう変わらない進行に落ち着いた。

情報の共有には、例年通りLINEやGoogleドライブを使用した。またZoomも使用した。夏季休業中など対面で話し合うことが難しい場合でも、複数人でリアルタイムの話し合いが可能となった。これらのツールの活用によって、各班内での情報共有は比較的円滑に行われた。しかし班の間での情報共有は必ずしもうまくいったとはいえない。実習生全体が進捗状況を把握するため、授業開始時に各班の作業を確認し、終了時に進捗状況を報告し合った。ところが実際のところ、各実習生は自らの作業で手いっぱいであり、他班の作業の進捗状況を把握できていたのは一握りであった。授業終了時の進捗状況報告は形骸化していたのである。

また作業の記録に関しても反省点が多い。毎回の授業に際して、各班の書記が議事録をとることになっていた。さらに今年度は、CLA（Class Learning Adviser: 実習を補助する学生スタッフ）が授業で毎回のように議事録作成を呼び掛けた。それにもかかわらず、議事録の作成は徹底されなかった。前期はCLAの呼びかけが功を奏したのか、議事録が充実していた。しかし後期になると、話し合いよりも各自の作業が中心となったためであろうか、議事録の作成がおろそかとなった。デザイン班にいたっては、後期に作成された議事録は10月20日の1日分のみであった。記録が不足していたため、展示終了後の報告書の作成が難航した。今後の実習では、議事録作成を担う書記以

外の実習生も、その確認を積極的に行い、作業の記録が徹底されることが期待される。

（佐藤・髙桑）

3. 資料調査と展示資料の選定について

本章では、企画展の展示資料概要を述べた後、展示資料の選定・調査とキャプション・パネル原稿の作成について詳述する。

⑴ 展示資料の概要

本企画展では、金沢大学資料館（以下、資料館）、金沢大学附属図書館（以下、附属図書館）、金沢大学医学部記念館（以下、医学部記念館）が所蔵する資料を用い、金沢大学およびその前身校と、海外との交流に着目した。「壱ノ談 近代化と外国人教師」「弐ノ談 戦争とアジアへの目線」「参ノ談 広がる国際交流」という3つの観点から、明治期から現代まで、それぞれの時代の交流の特徴を示す資料を選定した（表3）。壱ノ談では2人の外国人教師に関する資料を、弐ノ談では満洲・朝鮮修学旅行のアルバムを、参ノ談では国際交流協定校[16]から贈られた記念品を中心として構成した。

⑵ 展示資料の選定・調査

まず展示資料の選定にあたって、資料館のVirtual Museum Projectと学術資料データベース、さらにKURA[17]、『金沢大学医学部記念館資料室収蔵展示品目録』[18]等を用い、企画時に決定した「国際交流」というテーマに合う資料の候補を実習生全員で出し合った。そこで示された資料をもとに、6月に入る頃から、具体的にどのような意図を持って資料を展示するかを議論した。

資料をどう見せるか、という点で一番重視したのは、来館者に何を考えてもらいたいかということであった。企画当初から展示に使用したい資料の候補となっていたものの1つに、石川県師範学校の満鮮修学旅行のアルバムがあった。日中戦争下で実施されたこの修学旅行は、当時の日本による東アジアへの侵略・加害の歴史と関わるものである。故に、この資料を「国際交流」という枠組みで展示することへの懸念を示す意見があがった。話し合いの末、新型コロナウイルスの流行やロシア・ウクライナ間の戦争をはじめとした社会情勢の変化によって、各国の交流が大きな転換点を迎えている今、改めて海外との交流のあり方を考えたい、という企画コンセプトに立ち返り、ありのままの歴史を伝えることとした。そして展示の意図を最大限、来館者に伝えるには、時代を経て変化する国際交流のかたちを見せるのが良いのではないかという結論に至った。現代の私たちがどのように世界と関わっていくべきかを考える機会を提示できるような展示にしたい、という思いを確認し、展示構成を練っていった。企画展タイトルである「交談」は、このような意図のもとに、歴史物語を読み聞かせる伝統芸能である「講談」と、「交流の談」を掛け合わせたものである。こうして、「近代化と外国人教師」「戦争とアジアへの目線」「広がる国際交流」という3章構成ができあがり、ここからは資料の調査・キャプション等の作成を担当する資料班が作業を進めていった。資料班も3つに分かれ、各章に4、5人の担当者をつけて作業を分担した。

6月の後半から資料の閲覧調査を行い、展示資料の決定に向けて作業を進めた。目玉となるであろう資料を、授業時間内で2度にわたって閲覧し、その後の調査は各章の担当者で行うこととした。資料の閲覧は各所蔵館へ、教員や資料館職員を通して申請し、課外時間も利用して行った。資料の調査とともに展示の流れを考え、夏季休業直前の8月4日の授業で、ひととおりの展示資料リスト

を作成し終えた。

⑶ キャプション・パネル原稿の作成

夏季休業期間に入ると、いよいよキャプション・パネルの原稿作成に取りかかった。スケジュールは各章それぞれであったが、教員・実習生の情報共有ツールとして使用していたLINE、Googleドライブに加え、Zoomを活用して原稿の読み合わせをするなど、休業期間中にも円滑に展示準備をすすめた。各章で執筆した原稿は、夏季休業最終日に提出日をもうけ、10月初旬から班長を中心に校正を行った。複数人による執筆であったため、主に表記の揺れを統一するための修正を行った。その後、デザイン班によるキャプション・パネルデザインへの原稿流し込みを行うとともに、教員による校正を行い、10月末にキャプション・パネルの原型が完成した。展示のための文章としてふさわしい表記であるかなど、学生同士の話し合いでは見えてこなかった指摘を受け、実習ならではの学びがあった。さらにそこから微調整を加え、展示用の現物を印刷するに至った。その他、具体的なキャプション・パネルの作成については、第5章に譲る。

キャプション・パネル原稿の作成にあたっては、各章の資料の特性にあわせた苦労・工夫があった。壱ノ談では、第四高等学校で化学や物理学を教えた外国人教師を取りあげたため、講義の内容や実験機器の使用法といった、専門的な事柄を調べる必要があった。資料館の所蔵資料に限らず、医学部記念館や金沢市立玉川図書館近世史料館にも足を運び、調査を行った。その結果、図解等を取り入れた詳しい解説文を付するに至った。弐ノ談では満洲鮮修学旅行のアルバムを取りあげたが、当資料は綴じ部分の破損が大きく、開いた状態での展示が不可能であった。そのため、アルバムに収録されている写真をパネルに印刷し、展示した。パネルばかりで単調な展示になることを避けるため、アルバムに残されたコメントなどを紹介し、修学旅行に参加した学生たちの思いにも目を向けてもらえるよう考えた。さらにコラムを設けることで、モノ資料が少ない中でも展示内容に厚みが出るよう工夫した。そして参ノ談では、国際交流協定大学の記念品を取りあげたため、相手校の情報ならびに記念品の背景にある各地の伝統文化等の調査を要した。英語以外の言語で書かれた文章も読む必要があり、大学で履修した第二外国語の知識等を駆使した場面もあった。加えて、展示スペースの制限により紹介することができなかった多くの国際交流協定大学についても、地図を作成してパネルで紹介することで、金沢大学の国際交流の広がりを示すよう試みた。

⑷ 資料の借用

本企画展では、金沢大学資料館の他に、金沢大学附属図書館と金沢大学医学部記念館の資料を借用した。教員・資料館職員の協力のもと、医学部記念館からは「舎密学 二（ロスコー化学 下）」の1点を、附属図書館からは『新訳註解和独辞典』『中野重治全集』「現勢世界地図」の計3点を借用した。その他、資料借用は行っていないが、金沢市立玉川図書館近世史料館の「究理学（写）」を一部撮影し、パネルに使用した。

⑸ 評価

本企画展では、展示から来館者に何を考えてもらうか、という点を重視し、テーマ設定や扱う資料の選定を行った。そのため当初のコンセプト通り、歴史の延長線上にある現在の国際交流を考える、という展示を作り上げることができたと考える。章ごとのつながりを意識して、資料選定やキャプション・パネル原稿作りにも取り組むことができた。一方で、資料調査などを個々の作業に任せ

た部分が多く、資料班内、さらにはデザイン班・展示班との間での情報共有が十分でなかったという反省があった。この点については、情報共有の時間を設けることはもちろん、調査・作業の記録を、当人だけでなく、他者が見てもわかるように要項等を統一して記録し、皆が参照できる場所に提示することで改善できたのではないかと考える。

さらにもう一点、全体的なスケジュールの遅れを反省点としてあげる。コンセプトや展示の流れにこだわった分、具体的な資料調査に入るまでに多くの時間を要してしまった。一部では、展示の直前まで資料調査・選定を行った箇所もあり、他班の作業にも影響が生じた。資料班の仕事が進まなければ、他の仕事が動き出せないことが多くあるため、特にスケジュールを意識して動く必要があった。今回の事例でいえば、キャプション・パネル原稿の表記の統一を図ることができていなかったために、校正に時間がかかり、デザイン班に原稿をまわすのが遅くなってしまった。さらに、デザインに原稿を流し込んだ後に気づく修正点もあり、そうした事態に対応するため、スケジュールの余白を鑑みて動くべきであったと考える。

表3. 展示資料リスト

番号	資料名	資料番号 管理・請求番号	寸法（cm）	所蔵	備考
①壱ノ談　近代化と外国人教師					
1	キルヒホフ・ブンゼン氏分光器	420-01-002-26	長45×奥行25×高21	金沢大学資料館	
2	日光顕微鏡	420-01-002-18	長47×幅9.5×高7	金沢大学資料館	
3	「舎密学 二（ロスコー化学 下）」	854 LC34	縦23.5×横17×厚2	金沢大学医学部記念館	
4	『新訳註解和独辞典』（第40版）	BN05474449	縦16.4×横9.5×厚5.3	金沢大学附属図書館	
5	明治35年第1部第3年独法科生の写真	000-01-100-0 322		金沢大学資料館	
6	「先生の息子」（『中野重治全集』より）	BN03792115	高22	金沢大学附属図書館	
7	「明治34年12月1日調　傭外国人表」	200201070541	縦28×横21×厚7	金沢大学資料館	
8	「外国教師履歴書 第一輯」	200301075209	縦28.5×横20×厚2.2	金沢大学資料館	
	「壱ノ談」小計：8点				
②弐ノ談　戦争とアジアへの目線					
1	満鮮修学旅行之回想	D-21-0（師範学校写真115）	縦22×横31×厚3.5	金沢大学資料館	
1-①	「南大門前（集合写真）」 京城南大門前での集合写真	D-21-3			パネル展示
1-②	「慶会楼（キョンフェル）」 景福宮の慶会楼を見学する写真	D-21-4			パネル展示
1-③	「動物園」檻の前で動物を眺める写真	D-21-5			パネル展示
1-④	「日露役奉天会戦戦没将士霊並満洲事変戦没将士霊合祀忠霊塔」 忠霊塔に礼をする写真	D-21-9			パネル展示
1-⑤	「新京」駅での写真	D-21-11			パネル展示

番号	資料名	資料番号 管理・請求番号	寸法（cm）	所蔵	備考
1-⑥	「ハルピン」孔子廟の櫺星門を見学する写真	D-21-14			パネル展示
1-⑦	「水師営会見所（集合写真）」水師営会見所前での集合写真	D-21-28			パネル展示
1-⑧	「二〇三高地、爾霊山碑前（集合写真）」爾霊山碑前での集合写真	D-21-19			パネル展示
2	現勢世界地図	は-09 K2213 655	縦77.4×横108	金沢大学附属図書館	
	「弐ノ談」小計：10点				
③参ノ談　広がる国際交流					
1	刺繍絵画：国際交流協定大学記念品（蘇州大学）	74	縦33.5×横44	金沢大学資料館	
2	クウェンガリ（小太鼓）：国際交流協定大学記念品（釜慶大学校自然科学大学）	2	直径20/バチ 長43.5	金沢大学資料館	
3	大極扇（伝統韓紙扇）：国際交流協定大学記念品（湖西大学）	11	縦40×横29×厚5	金沢大学資料館	
4	メダル：国際交流協定大学記念品（レーゲンスブルク大学）	28	ケース 縦24×横10.5	金沢大学資料館	
5	絵（木彫）：国際交流協定大学記念品（カザン大学）	10	縦37×横43×厚5.5	金沢大学資料館	
	「参ノ談」小計：5点				
	資料総計：23点				

（岡野）

4. 展示室の構成と設営について

本章では、展示室の構成と設営について述べる。

展示室の構成を決定するにあたり、展示什器と資料館展示室内の展示スペースの測定、使用する展示什器の選定を行った。資料班から共有された展示資料の測定データと展示資料リストに基づき、展示配置案を構想した。展示配置案は、展示班内や資料班との話し合いを通して、その都度、修正を加えて確定させた。

11月7日から、展示作業を開始し、展示什器の搬入・設置、展示資料の搬入および陳列、パネル・キャプションの印刷と設置、展示資料・什器の配置と調整、フロアマーカーの設置、ライティング等の展示の微調整の手順で行った。展示作業の詳細は第2節「展示室の設営」で後述する。

⑴ 展示室の構成内容

展示室は、「壱ノ談 近代化と外国人教師」、「弐ノ談 戦争とアジアへの目線」、「参ノ談 広がる国際交流」の3章構成となっている。展示室の順路は時計回りの一方通行に設定した。今回の企画展では、金沢大学とその前身校の国際交流の物語に焦点を当て、来館者に金沢大学とその前身校が過去に行った世界との交流、当時の学生たちの交流の捉え方を感じてもらうことを意図した。そのため、章ごとに伝えたいメッセージが明確になるよう、展示資料やパネルの配置を工夫した。順路とソーシャル・ディスタンスの2つを示すフロアマーカーはポスターに描かれている足跡のデータを

活用して作成し、デザインに統一感を持たせた。

企画展の目玉資料はそれぞれの章に1つずつ設けた。壱ノ談では「日光顕微鏡」、弐ノ談では「満鮮修学旅行之回想」、参ノ談では「木彫」である。「日光顕微鏡」は高脚立方体の什器に、「満鮮修学旅行之回想」はのぞき正方形の什器に、「木彫」は特注アクリル立方体の什器に展示した。「日光顕微鏡」は順路の初め、「満鮮修学旅行之回想」は順路の半ば、「木彫」は順路の終わりに展示し、来館者に対して、企画展を印象付ける資料となることを企図した。

「壱ノ談 近代化と外国人教師」では、スロイスとヴォールファルトという2人の外国人教師を中心とした展示を行った。金沢医学館において先進的な化学・物理・医学の分野で貢献したピートル・J. A. スロイスが、講義の際に用いた「日光顕微鏡」や「キルヒホフ・ブンゼン氏分光器」を展示した。また、その講義の様子を記した『舎密学』（当時の学生による講義録）をあわせて展示することで、明治期の学習の内容を具体的に見せることを目指した。物理実験器具の原理や役割については、資料班が「スロイスによる「究理学」講義」と題したパネルを作成し、来館者の理解を促していた。第四高等学校でドイツ語教育に貢献したエルンスト・ヴォールファルトについては「外国教師履歴書 第一輯」や、ヴォールファルトが編纂に加わった『新訳註解和独辞典』（第40版）などを展示した。展示を通して、明治から大正にかけての当時の外国人教師の立ち位置や、彼らが日本の近代化をどのように手伝ったのか、また、当時の学生が何を学んでいたのかを来館者に見てもらうことを目的とした。

「弐ノ談 戦争とアジアへの目線」では、戦時下（日中戦争～太平洋戦争）の学生がアジアをどう捉えていたかについて、写真資料を中心に展示を行った。石川県師範学校の満洲・朝鮮への修学旅行アルバム「満鮮修学旅行之回想」をモノ資料として展示したうえで、修学旅行で撮影された写真をA3やA4に拡大してパネル展示とした。軍国主義的意識が高まる中で行われた石川県師範学校の満鮮修学旅行の様子を、当時の学生が制作したアルバムから読み解くという展示である。アルバムのうち、特に「南大門（集合写真）」は、軍国主義が背景に潜みつつも、旅という非日常の時間を楽しむ学生たちの思いが伝わってくるような、何とも修学旅行らしい写真である。旅行の行程を示したパネルを中心に、周囲に複数の写真パネルを配置することで、来館者が修学旅行を当時の学生とともに追体験できるような展示を心掛けた。修学旅行の行程表と写真パネルの展示は、資料班と話し合いを重ね、パネルやキャプションの大きさ、配置を工夫したことで見やすい展示となった（図1）。修学旅行の展示の真向かいに設置した「現勢世界地図」は当時、教材として使われた掛図である。地図上では日本列島に加え、樺太南部や朝鮮半島、台湾、ミクロネシアの島々が赤色で示され、1936年当時の日本の勢力圏を表している。「現勢世界地図」は縦の長さが大きく、什器（大型ケース）に入らないことが懸念された。資料館職員と相談して、掛図の下部分を少し巻いて展示することで解決した。

「参ノ談 広がる国際交流」では、金沢大学リエゾンオフィスと国際交流協定校を示したパネルとともに、世界各地の国際交流協定校から贈られた記念品を中心に展示を行った。リエゾンオフィスや国際交流協定校の記念品を通じて、現代の金沢大学の海外との交流、つながりを見る展示となっている。展示した記念品の内訳は、中国の蘇州大学から贈られた「刺繍絵画」、韓国の釜慶大学校から贈られた「クウェンガリ（小太鼓）」、同じく韓国の湖西大学から贈られた「太極扇（伝統韓紙扇）」、ドイツのレーゲンスブルク大学から贈られた「メダル」、ロシアのカザン大学から贈られた「木彫」である。特筆すべきは目玉資料の「木彫」である。当資料には、兼六園の徽軫灯籠を中心として、右側に金沢の、左側にカザンの代表的な建造物が彫られており、その構図は、まさに両校の友好を象徴するかのよ

うである。金沢は金沢大学本部棟や金沢城石川門など、カザンはカザン大学本館やスパスカヤ塔などがモチーフとなっている。キャプションとは別に、これらのモチーフを解説したパネルを展示した。またライティングの際、「木彫」にキャプションの影が映りこまないよう、調整するのに苦労した。

⑵ 展示室の設営

展示室の設営は11月7日～11月11日の5日間で行った。設営作業は2～4限の時間帯に行い、資料班、デザイン班、展示班の3つの班から分担者を1、2人ずつ選出して合計で5人程度のグルー

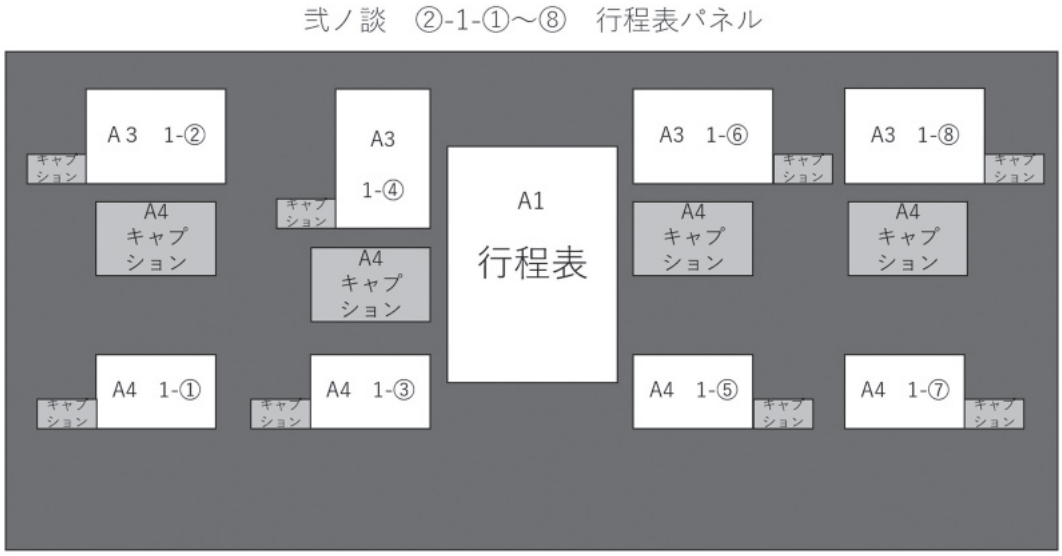

図1. 弐ノ談、行程表およびアルバム写真パネルの壁面展示構成（正面図）

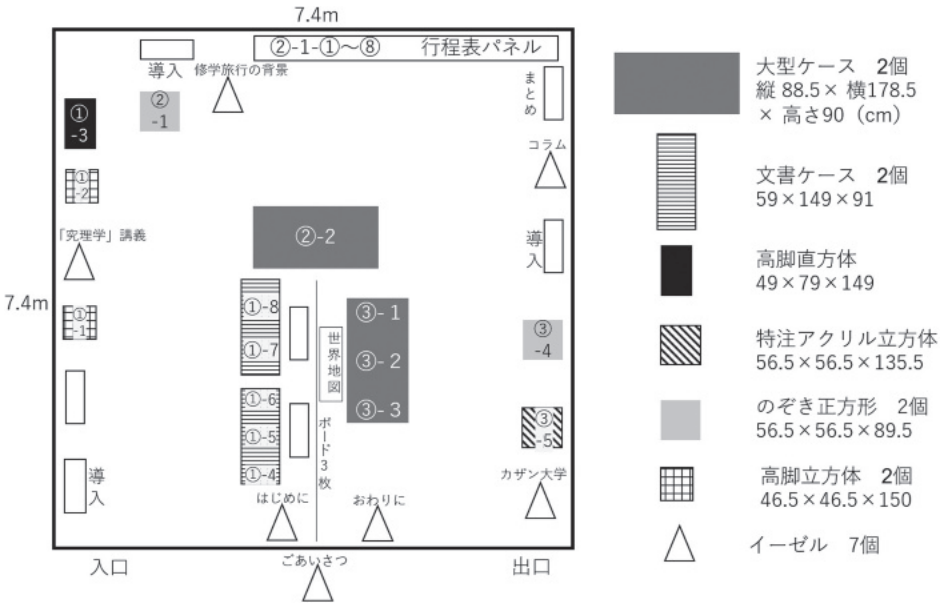

図2. 展示室の構成（平面図）

プ単位を構成し、シフトを組んで作業を行った。展示室における設営作業は展示班と資料班が中心になって行い、これと並行してデザイン班と資料班を中心にパネルの印刷、貼り付け作業が進行した。パネルが作成され次第、展示室に運び込み、パネルの展示作業を行った。パネルの位置はボードの縦・横の中心を割り出して、決定した。章ごとにパネルの上下左右の位置を統一することで、見栄えが良くなった。展示作業のグループは授業時間の90分ごとに交代した。

展示作業は展示資料および什器を資料館展示室に搬入した上で、展示配置案（図2）に基づいて実施した。展示配置案を計画した展示班が主体的に指示をしつつ、他の班とともに展示作業を行った。資料館職員に助言を受けながら展示作業を進めていく中で、展示案で示したよりも適切な展示方法が見つかった場合は適宜、展示を修正した。修正を加えた際は再度、動線についても検討することで、来館者にとって見やすい展示となった。

⑶ 評価

展示配置案の作成にあたり、展示資料のサイズについて資料班と綿密に連絡をとり、什器の選定を行うこと、また、使用する展示什器などの決定事項はこまめに資料班に共有することが、スムーズな展示計画策定につながる。展示什器はそれぞれの種類に呼称を設定したことで、混同を避けられ、什器の選定や展示作業を円滑に進めることができた。展示配置案はシミュレーションであり、実際に展示作業を始めた時に生じる誤差を最小限にしたい。そのため、展示スペースの外周および内周、確保すべき動線の幅、展示什器の外寸・内寸・床からの高さ、イーゼルの大きさ、展示スペースを区切るボード1枚あたりの大きさなどを細かく測定して記録し、共有することが必要である。

展示配置案の作成当初は、資料班との連携がうまくいかず、展示資料がわからなかったため計画の変更、修正が多かった。壱ノ談の部分では、展示ケースの大きさと配置の関係により、展示順路を少し戻るような動線になってしまった。図面上と実際の空間では違いがあるため、実際に展示室に足を運んで確認することが大切である。資料班と話し合いを重ねて、最終的には来館者にメッセージが伝わるような展示の配置にすることができた。

展示作業にあたり、パネル・キャプションの位置やサイズについて、資料班との意思疎通を図る必要がある。展示資料リストに変更が生じた場合は、速やかに展示作業のメンバーに共有することで混乱を避けることができる。展示室設営の期間は、毎時間ごとに展示作業とパネルの印刷作業の進捗状況を、それぞれの代表者がLINEで報告したため、情報の共有がなされ、作業の引き継ぎも滞りなく進めることができた。資料館展示室での展示作業は資料館職員の方がはるかに詳しいので、助言を請うと良い。展示配置案はいくら検討を重ねたとしても、実際に資料を陳列、什器を搬入した段階で修正が必要になる。そのため、展示配置案に固執せず、展示作業の都度、臨機応変に修正を加え、最適な展示方法、展示位置を模索することが重要である。

最後に、展示班のスケジュール管理の問題について言及したい。展示班は7月に資料班から展示資料リストを共有され、展示配置案の構想に至るまで、実質的な作業が少なかった。5月下旬に、全体での企画案のコンセプト・章立ての話し合いを経て、企画案に一定の方向性が見られ、6月からそれぞれの班ごとの作業に移行した。6月から7月末にかけての2か月間に、展示班は展示スペースや展示什器の測定、資料班と共同で展示資料の測定を行った。しかし、肝心の展示配置案は、資料班との連絡・連携不足に加え、展示資料が未確定の状態だったため、思うように構想が進まなかった。展示資料リストが確定しない限り、展示配置案は中途半端なものになる。結局、展示スペースや什器、展示資料を測定する以外は、漫然と授業時間を浪費するだけになってしまった。大きな反

省点である。同時期の資料班やデザイン班と比べても、展示班の作業量・作業時間は少なかったように思われる。企画案の方向性がようやく決まった段階で、資料班に早く、確定的な展示資料リストを出してもらうのは不可能である。

これからの博物館実習では、展示班は展示スペースや什器の測定が終わり次第、資料班に合流して、展示資料リストが確定するまで、資料班と行動を共にし、資料班の作業を手伝うというのはどうだろうか。展示班が、資料班による資料の調査や資料の選定の議論に加われば、両者の連絡・連携不足は解消され、意思疎通が容易になる。そればかりか、展示資料リストの確定が早くなる可能性もあり、展示配置案の構想に早く取り組むことができるというメリットもある。6月から7月にかけての展示班の無駄がある時間を、資料班との有意義な時間に変えることができる。

（中田）

5. 展示に関する制作物について

本章では企画展に関連する制作物について述べる。本企画展での制作物は主に展示資料の基礎的な情報及び資料解説を記すキャプション、企画展の趣旨や各章の趣旨、金沢大学及びその前身校の国際交流についての解説を提示するパネル、企画展の広報としてのポスター・チラシである。加えて第4節「その他制作物」において、以上に挙げた制作物以外についても触れることとする。

⑴ キャプションの構成と作成

キャプションは、上記の通り展示資料の基礎的な情報及び資料解説を示す目的のために作成した。1つの展示資料につき1つのキャプションを作成することとし、最終的に計23点のキャプションを作成した。キャプションに記載する内容としては、原則として資料名、年代、所蔵館、解説文を記し、資料名と年代及び所蔵館名は日本語と英語を併記した。

展示資料に関する情報の調査と、調査で得た資料情報に基づくキャプション原稿の執筆は資料班が担当し、教員と資料館職員が校正を行った。キャプションは資料館で使用されている雛形を用い、入力はデザイン班が行った。

⑵ パネルの構成と作成

パネルの種類は大きく分けて「挨拶パネル」、「章立てパネル」、「解説パネル」、「資料付図」の4種類に分けられる。挨拶パネルは「ごあいさつ」、「はじめに」、「おわりに」の計3枚（A0/A1）、章立てパネル（図3）は「壱ノ談—近代化と外国人教師—」、「弐ノ談—戦争とアジアへの目線—」、「参ノ談—広がる国際交流—」の計3枚（A1）、解説パネル（図4）は「ピートル・J.A.スロイス」「スロイスによる「究理学」講義」「修学旅行の背景」「行程図」「慶会楼」「日露役奉天会戦戦没将士霊並満洲事変戦没将士霊合祀忠霊塔」「ハルピン」「二〇三高地、爾霊山碑前（集合写真）」「戦時期の修学旅行をみつめて」「コラム 戦時期の学生—海外との交流—」「大学間国際交流協定機関とリエゾンオフィスの位置」「カザン大学木彫」の計12枚（A0/A1/A2/A4横）、資料付図は「舎密学ミニパネル」「日光顕微鏡スケッチ」「分光器スケッチ」の計3枚（A4横）で構成した。

「挨拶パネル」と「章立てパネル」及び「解説パネル」の原稿は資料班が執筆し、教員と資料館職員に校正を依頼した。これらのパネルに「資料付図」を加えた全てのパネルのデザイン及び作成は、デザイン班が行った。また、全ての解説パネルには英題を付し、「スロイスによる「究理学」講義」

「行程図」「大学間国際交流協定機関とリエゾンオフィスの位置」に挿入されている地図や解説図などは、資料班の依頼をもとにデザイン班が制作した。

⑶ ポスター・チラシの構成と作成

企画展の広報のための印刷物としてポスター・チラシの2種類を作成した。ポスター（A2、縦、カラー）は片面とし、タイトル、資料写真、場所、開催期間、休館日、問い合わせ先、金沢大学ロゴで構成した（図5）。チラシは両面とし、チラシ表（A4、縦、カラー）はポスターと同じ内容とデザインを採用した。チラシ裏（A4、縦、カラー）は企画展紹介、資料写真と紹介、アクセスマップ、ミュージアムツアーについての情報で構成した（図6）。ミュージアムツアーの詳細な内容及び日程は、新型コロナウイルス感染状況次第で中止することも想定されたためポスター及びチラシに掲載しなかった。

ポスター・チラシの作成にあたり、作成する準備として、デザイン班メンバーが各自ポスターのレイアウト案を作成し、班内で方向性を話し合った。さらに、最終案決定まで、実習生全体で全3回の意見交換の場を設け、各案の良い点や改善点などを募った。その後、投票数が1番多かったポスター案を基にAdobe Illustratorでポスターを作成した。これと並行してチラシの裏に入れる情報を整理し、企画展の紹介文の作成や展示タイトルのタイポグラフィ作成、写真撮影などを行った。資料の説明文は資料班が執筆し、デザイン班が文字数や体裁を整えた。資料写真は資料館地下準備室にて撮影し、Adobe Photoshopで加工・トリミングを行った。これらの工程を終え、ポスター・チラシデータを入稿した。ポスターは50部発注し、学内等に掲示するとともに、学外へ25部送付、チラシは700部発注し、学内等に掲載・配付するとともに、学外へ250部（各館10部ずつ）送付した。ポスター・チラシの発送を行った外部機関は、金沢市内を中心とした博物館・美術館・主要図書館全25館である。

⑷ その他制作物

その他の展示に関する制作物として、告知メール、資料館Webサイト用バナー及び資料館Webサイト用告知文、展示動線用フロアマーカー、企画書の作成を挙げる。

告知メールは、金沢大学の学内メールであるアカンサスポータルメールから学内に向けて送付する告知メールを指す。このアカンサスポータルメールを通して、企画展開催に関する告知メール、ミュージアムツアーの告知メールを全体リーダー・サブリーダーが準備・送付した。ミュージアムツアーの告知メールには各回の開催日時とタイトルを記した。また、企画展の告知はメールの他にTwitter（現X）上でも行った。

資料館Webサイト用の告知バナーについては、展示タイトルと目玉資料の写真で構成した（図7）。デザインは、ポスターのデザインと統一感が出るよう調整し作成した。資料館Webサイト用告知文は、チラシやパネルの文章を参考に200字程度で作成した。作成はデザイン班が担当し、前者についてはAdobe Illustratorを用いて作成した。これら2点を揃えて、データを資料館へ提出した。そのほか、展示室内に設置する展示動線を記すフロアマーカーのデザインは、展示班と協力して作成し、そのデザインはポスターで使用されている足跡で統一した。

企画書はリーダー班が作成し、10月末に資料館に提出した。内容として、会期、時間、展示場所、主催、協力機関、企画名称、展示コンセプトを記載するとともに、展示資料リストと展示レイアウト図を添付した。

図3．章立てパネル

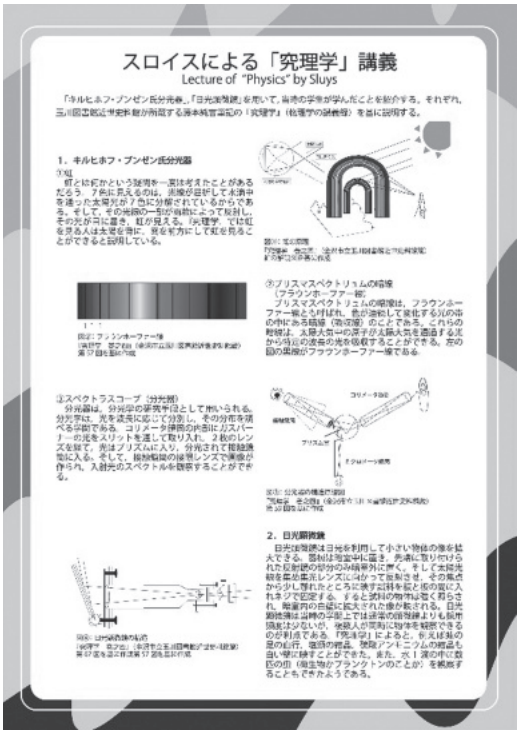

図4．解説パネル

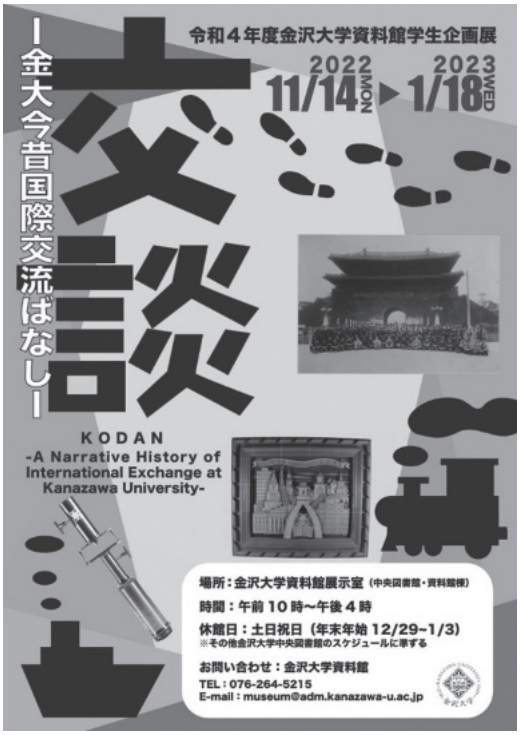

図5．ポスター・チラシ表面

図6．チラシ裏面

図7. 資料館Webサイト用バナー

⑸ 評価

ポスター・チラシデザインについては、本企画展の構想が「交流の談」と「講談」の掛け合わせからスタートしていたことから、「国際交流」と「講談」の各要素をどの程度組み込むのか、また、テーマが「国際交流」という多様なイメージを有するものであったために、その多様なイメージをどのようにまとめていくかという2点が主な課題であった。他班の意見も参考にしながら修正を重ねた結果、空と海をイメージした背景に「弐ノ談 戦争とアジアへの目線」で取り上げた修学旅行の移動手段である徒歩・汽車・船舶のモチーフを取り込み、本企画展のテーマである「国際交流」のイメージを表現することができた。一方で、デザイン案の仮決定後に大幅な変更が加わることが多く、最終決定にいたるまでに当初の想定以上の時間を要してしまい、パネル・キャプションなど他の作業の進行にも影響が生じてしまった点は反省すべき点である。

パネル及びキャプションの作成については、デザイン班の中で役割を分担して作業を進めたが、班内での進捗状況の報告・共有が十分に行われていなかった。展示準備の完了に向けてデザイン班内及び実習生全体で作業計画を調整するためにも、班員各自の進捗状況の共有とタスクの管理が適切に行われるべきであった。また、ポスター・チラシデザインの作成が遅れたことなどもあり、パネル及びキャプションの校正の期間を十分に確保することができなかった。そのため、パネル・キャプションの設置後に誤字などが見つかり、修正して再度設置するなど、余裕を持って設営に取り掛かることができなかった。今回、展示に関する制作物を作成していく中で、改めて明確な作業計画を立てた上で、その計画に沿って作業を進めていくことの重要性を認識した。

（原田）

6. 教育普及活動等の実施

かつての博物館実習では、教育普及活動としてミュージアムツアー（以下、ツアー）とワークショップが実施されていたが、未だ収束しない新型コロナウイルスの感染状況を鑑みて、2020・2021年度の例にならい、ワークショップの実施を見送った。従って本章では、教育普及活動として実施したツアーとその動画の作成・公開について述べることとする。

⑴ ミュージアムツアーの実施

ツアーは、去年の事例を参考にして、12月中旬の昼休みに実施した。月曜日から金曜日までの

全5回、質疑応答を含めて20～30分の展示解説を行った。各回15名前後の参加者があり、最大人数は20名、総計で85名が参加した。

ツアーは実習生全員で行い、各基礎班から均等に、月～金曜日の担当班に振り分けた。また、今年度は5日間で展示全体を解説できるよう、全体の趣旨、壱ノ談～参ノ談（展示内容）、展示方法・デザインという内容構成で、曜日ごとに解説内容を検討し、実施した（表4）。

当日に用いたシナリオは、各班で作成したのち、5～6名の担当者で分担した。話す内容は、展示資料の概説だけでなく、キャプションに載っていない情報（資料選定の理由、外国人教師にまつわる寸劇、展示では取り上げなかった関連人物の説明、照明の当て方、デザイン決定までの経緯）も加えて、参加者に楽しんでもらえるよう工夫を凝らした。リハーサルの前週までに台本を教員に送り、助言をもとに修正した。

12月1日に資料館で行われたリハーサルでは、教員や資料館職員の立ち会い、ビデオ撮影者の同伴で、本番と同じ形式でツアーの流れを確認した。1人2～3分、各班15分前後の持ち時間と、解説時間の長さも本番を想定して行った。各班終了後、原稿の内容や話し方などについて、実習生や教員、資料館職員から助言を受けた。当日は、リハーサルの反省をもとに各班で再度内容を修正し、本番に臨んだ（図8）。

ツアーにあわせて、その告知をアカンサスポータルメール（学内メール）で行った。文面の草案を全体リーダーが作成した後、教員や資料館職員の修正を経て、資料館職員が送信した。さらに本番当日、資料館と建物を共有する附属図書館の館内放送でも告知を行った。放送原稿は、ツアーの各日程の担当者が作成し、教員・資料館職員の校正を経て完成させた。附属図書館職員の協力のもと、アナウンス担当者がツアー開始10分前・5分前の2回、館内放送を行った。

表4. ミュージアムツアーのスケジュール

日程	タイトル	内容	参加人数（人）
12/12（月）	3つの交談～展示のコンセプトとこだわり～	各章の展示概要	16
12/13（火）	近代化と外国人教師～交流と貢献のはなし～	壱ノ談（外国人教師）	17
12/14（水）	戦時下の国際交流～学生たちの視点から～	弐ノ談（満州・朝鮮修学旅行）	13
12/15（木）	協定校からの記念品～広がる国際交流の証～	参ノ談（国際交流協定校記念品）	19
12/16（金）	交談裏話集～展示完成までの足跡をたどる～	展示、デザインの裏話	20

図8. ミュージアムツアー「協定校からの記念品～広がる国際交流の証～」の様子

⑵ ミュージアムツアー動画の配信

今年度の学生企画展ではワークショップを実施しない方針を立てたため、代わりに昨年度のツアーを参考にして、ツアーの様子をビデオで撮影し、動画投稿サイトYouTubeにて配信することにした。配信用ビデオの撮影については、担当者を補欠含めて2名選び、当日どちらかが参加できない場合でも対応できるようにした。また、動画を撮影する際に、肖像権の侵害を避けるため、参加者の姿が映らないように配慮した。動画編集は、ツアー終了後、各班の担当者が動画編集ソフトAdobe Premiere Pro 2020を使用して行った。動画編集の際、別個にサムネイルやテロップ用の素材も用意した。編集した動画は、1月4日～1月12日にかけて、全5回分をYouTubeにて順次公開した[19]。

⑶ 評価

ツアーについて、以下に評価を述べることにする。

シナリオ作成にあたっては、各班で解説内容が被らないように、情報共有をある程度行うことができた。主に資料班が中心となって行われたが、シナリオの作成中、他班の人が話し合いに参加できないまま完成してしまう場合も見られた。あらかじめ展示内容や特に伝えたいことを他班の人とも共有したうえで、全員でシナリオ作りに取り組むと良いだろう。

リハーサルについては、月曜→火曜→水曜→木曜→金曜の順に行い、最低でも担当の回にいれば良いという形式だったため、他班のリハーサルを見学している学生が少なかった。しかし、他の班の様子を客観的に見ることで得られるヒントも多い。最低限、担当した回の前後の回に、参加すべきであっただろう。また、本番は時間が限られてくるため、リハーサル時点で、自分が立つ位置、参加者の移動順路も想定しておくべきである。

本番では、概要説明だけでなく、寸劇や歌など参加者を飽きさせない工夫も見られ、展示内容をよりわかりやすい方法で伝えることができた。また、当日欠席者があっても、リハーサルで流れを確認していたのでメンバー内でカバーできた。

また動画配信については、Googleドライブで共有されていた編集マニュアルが非常に参考になった。この配信によって、実習生が作りあげたツアーが学内外に広く伝わったことであろう。

最後に注意点として、ツアー時には、話す際に必ず参加者の反応を見るようにしなければならない。参加者全員が同じ知識、興味関心を持っているとは限らないからである。そのため、彼らの表情や反応を確認しつつ、少し話を省略・補足したり、間を空けたりするなど、臨機応変に対処する訓練が必要となるだろう。そのためにもまず、原稿を暗記しておくことが重要である。しかし、原稿を丸覚えするのではなく、要点を踏まえてさえいれば、多少覚えていなくても全く問題ないだろう。むしろ、原稿を意識しすぎると、参加者の反応を無視したツアーになりかねない。フリップの裏に原稿を書き込み、参加者に見えない形で読むという工夫も見られたが、彼らの反応に従って内容をアレンジさせる必要があることを常に意識しておくべきであろう。

（笘居）

7. 学生展への大学資料館の関わり

前述の通り、「交談―金大今昔国際交流ばなし―」は、金沢大学と前身校の国際交流をテーマとする学生企画展である。博物館実習生による学生企画展も9回目となり、今や金沢大学資料館にとって欠かせないイベントに位置づけられている。

この学生企画展の最大の特徴は、企画立案・資料調査・原稿作成・展示陳列作業・広報等、企画展の全てにおいて学生が主体となっていることである。年度によって学生の負担内容は異なるものの、2014年度の最初の学生企画展「植物図「館」」以来、学生主体という主軸は一度もぶれたことがない。もちろん、教員や資料館職員が全く関与しないわけではなく、学生の主体性を妨げない範囲でのサポートやアドバイスは適宜行っている。以下では、資料館所属教員の立場から改めて今回の学生企画展を振り返り、同展に資料館がどのように関わったのかについて述べる。その上で、大学附属の資料館で学生企画展を行う意義について考察し、本稿の総括としたい。

繰り返しになるが、今年度の学生企画展もコロナ禍での開催になった。さすがにコロナ禍3年目で、2020年度・2021年度のような強い規制はなかったが、それでも学生展を実施することに多少の不安はあった。とは言え、誰もが感染対策のノウハウを身につけ、多くの人々がワクチン接種をしている状態であり、まずは学生企画展を開催する前提で2022年度の博物館実習を始めた。第1クォーターは、班編成と企画立案の期間であるが、その前に資料館所属教員である松永が過去の学生企画展の実例と企画立案にあたっての注意事項・ルールを実習生に伝えた。資料・キャプション班、デザイン班、展示班に分かれた実習生たちは、過去8回の学生企画展を踏まえた上で各自新たなテーマを捻り出し、最終的に4案を競わせた結果決まったのが国際交流をテーマとする学生企画展「交談」なのである。これは、文部科学省スーパーグローバル大学認定大学[20]であり、国際交流を重視・推進している金沢大学にふさわしい企画と言えよう。海外旅行を取り上げる点では、前年度の学生企画展で採用されなかった「Golden Journey」という案と共通する部分があり、コロナ禍によって学生の海外への想いが強まったことがうかがわれた。

第1クォーターで班編成と企画案が決まった後、第2クォーターはさらに具体的な企画内容を検

討しながら、班ごとの作業を進めた。資料・キャプション班は展示候補の資料調査を、デザイン班はチラシ・ポスター等のデザインを、展示班は展示スペースや展示什器の確認・計測を行い、それぞれの進捗状況をLINEやGoogleドライブで共有した。資料館職員は、各班の相談に乗りながら作業のサポートをした。特に松永は、医学部記念館での資料調査に立ち会うなど、教員としてのサポートも行った。

夏季休業期間は、基本的に実習生がそれぞれ自主的に動いていたが、LINE等でのやり取りは教員・資料館職員も把握しており、適宜アドバイスをした。なお、夏季休業中の9月7日には日本の新型コロナウイルス水際対策が緩和されており[21]、学生企画展がコロナウイルスによって何らかの制限を受ける可能性はほぼなくなった。

第3クォーターに入って、いよいよパネル・キャプション、チラシ・ポスター、展示計画、企画書等がそれぞれ形になっていく中、教員と資料館職員は各種原稿の校正や展示計画の確認を行い、企画実現に向けて実習生をサポートした。特に、学生企画展開始直前の11月第2週は毎年のことだが慌ただしく、教員・資料館職員は必ず誰かが実習生のパネル・キャプション印刷や展示陳列作業に付き合うようにした。この間、実際の展示方法等について教員・資料館職員から色々アドバイスしたが、その一方で展示資料に合わせた台を自分たちで工夫して作るなど、実習生のアイディアに感心させられることもあった。

そして2022年11月14日、令和4年度学生企画展「交談―金大今昔国際交流ばなし―」は無事開催を迎えた。

その後、教育普及活動としてミュージアムツアーの準備に移り、教員と資料館職員は12月1日のリハーサルに立ち会ってツアー各班（月～金の各回に対応した5班）にアドバイスをした。そして、前々年度・前年度同様、12月第3週にツアーを実施した。各回内容や伝え方に個性や工夫があって面白く、参加者の中には複数回来てくださった教職員・学生もいた。結果、5日間のツアーに延べ85名もの参加者があった。

そして、ツアーの様子を実習生自ら撮影・編集した動画ファイルを、やはり前々年度・前年度同様、YouTubeの金沢大学公式チャンネルで公開した。教員と資料館職員は、編集した動画ファイルの公開前チェックをするとともに、大学広報室に公式チャンネルへの動画アップ依頼をした。動画は2023年1月4日から1回分ずつ公開することになり、第2回は1月6日、第3回は1月10日、第4回は1月11日、第5回は1月12日に公開となった。いずれも力作であり、現在も公開中なのでぜひご視聴いただきたい。

その後、2023年1月18日をもって「交談」は無事閉幕となり、会期中の来館者数は865名であった。翌19日の授業時間中に実習生自ら撤収作業をしてもらったが、ちょうどこの日は四高記念館でのアウトリーチ展（「バックヤードの動物たち」: 前身校由来の剥製標本を中心とした出張展）の什器・資料搬入日でもあった。資料館職員はそちらを優先せざるを得なかったため、学生企画展の撤収作業については主に松永が指示をした。

なお、今回の学生企画展については、北陸中日新聞の連載記事に取り上げられたことが特筆される。具体的には、本学国際基幹教育院の井出明准教授の連載「井出明のダークツーリズムで歩く北陸の近現代」の第18回（2022年12月3日）に、「金沢大 学生視点の企画展」のタイトルで紹介された[22]。井出准教授の専門であるダークツーリズム（戦争や災害の跡地を巡る観光）に関連して、特に弐ノ談の満鮮修学旅行のことを取り上げていただいたのである。実習生が熱心に資料調査し、それを踏まえて自分たちなりに考え抜いて作った解説パネルが、専門家の目に留まったことは実に

喜ばしい。これは、今回の学生企画展の内容が、学術的な水準に達していることを示しており、まさに大学資料館ならではの教育効果と言えよう。単に学芸員としての実技を習得するだけでなく、学生一人一人が学術的な視点を深められることも、大学資料館で学生企画展を行う意義なのである。

以上、令和4年度学生企画展「交談」について、資料館所属教員の立場から振り返ってみた。展示内容としては、今後の国際交流を考える上で大変意義のあるものとなった。いよいよコロナ禍も終わりを告げ、海外への行き来も自由になってきたが、過去の国際交流を踏まえた上で見る外国はまた違ったものとなるだろう。

（松永）

註

1　文部科学省2009『博物館学芸員ガイドライン』
2　「博物館相当施設」（博物館に相当する施設）は、2023年4月1日施行の新博物館法によって「指定施設」と呼ぶことになった。
3　笠原健司「金沢大学資料館における博物館実習の取り組み」『金沢大学資料館紀要』No.11、2016年3月、金沢大学資料館、55-56頁。
4　前掲論文57頁。
5　笠原健司，笠原朋与，野村将之，虫明慧子，渡辺司，有村誠「学生による企画展の振り返り」『金沢大学資料館紀要』No. 12、2017年3月、金沢大学資料館、1-20頁。
6　小口歩美，川邊咲子，本庄有紀，笠原健司，菅原裕文，河合望「学生による企画展の報告「ハカリモノ―文系学生が紹介する科学実験機器―」」『金沢大学資料館紀要』No. 13、2018年3月、金沢大学資料館、27-50頁。
7　鈴木彩可，米田結華，室谷颯花，北澤怜子，笠原健司，菅原裕文，河合望「学生による企画展の報告「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」」『金沢大学資料館紀要』No. 14、2019年3月、金沢大学資料館、19-38頁。
8　松下梓，岡田優太，櫻井宇佳，藤本夏実，笠原健司，菅原裕文，河合望「物録（モノローグ）－資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」『金沢大学資料館紀要』No. 15、2020年3月、金沢大学資料館、1-20頁。
9　岡部睦，松永篤知，菅原裕文，河合望「学生による企画展の報告「いろは―多彩な技術から見る色の世界―」」『金沢大学資料館紀要』No. 16、2021年3月、金沢大学資料館、1-22頁。
10　古田哲朗，大木紗英子，松永篤知，河合望「学生による企画展の報告「写真で見る前身校Part Ⅱ～キンダイ医学の源流を辿る～」」『金沢大学資料館紀要』No. 17、2022年3月、金沢大学資料館、1-24頁。
11　多田明加，椿野智之，中神悠雅，松永篤知，河合望「学生による企画展の報告「光をシコウする」」『金沢大学資料館紀要』No. 18、2023年3月、金沢大学資料館、1-25頁。
12　企画展終了後に実習生によってまとめられた実習報告書。
13　金沢大学資料館Virtual Museum Project〈https://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/〉
14　金沢大学資料館 学術資料データベース〈http://clctdb.w3.kanazawa-u.ac.jp/〉
15　前掲9
16　金沢大学と大学間交流協定を結んでいる海外の大学。

17　金沢大学学術情報リポジトリKURA〈https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/〉

18　金沢大学医学部記念館 収蔵品調査プロジェクトチームにより作成された目録。2009年3月第1版。

19　ミュージアムツアーの各動画のURLは以下の通りである。
・第1回「3つの交談～展示のコンセプトとこだわり～」
〈https://www.youtube.com/watch?v=lktEDD80Mng〉
・第2回「近代化と外国人教師～交流と貢献のはなし～」
〈https://www.youtube.com/watch?v=zhBl9eO8n7Q〉
・第3回「戦時下の国際交流～学生たちの視点から～」
〈https://www.youtube.com/watch?v=1-VisFAIffw〉
・第4回「協定校からの記念品～広がる国際交流の証～」
〈https://www.youtube.com/watch?v=jDjrbUjKcEU〉
・第5回「交談裏話集～展示完成までの足跡をたどる～」
〈https://www.youtube.com/watch?v=HReae1tuUI8〉

20　スーパーグローバル大学認定大学とは、2014年に文部科学省が創設したスーパーグローバル大学創成支援事業に認定された大学のことである。徹底した大学改革と国際化を断行し、世界レベルの教育研究を行う大学や、我が国社会の国際化を牽引する大学が、最大10年間重点的に支援を受けることになっている。世界大学ランキングトップ100を目指す力がある、世界レベルの教育研究を行う大学を対象とする「トップ型」と、これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引する大学を対象とする「グローバル化牽引型」の2タイプがあり、金沢大学は後者に認定されている。

21　2022年9月7日より、一日当たりの入国者数の上限が2万人から5万人に引き上げられ、またワクチンを3回以上接種していれば入国前72時間の陰性証明提出が免除となった。

22　この記事は、中日新聞オンライン版〈https://www.chunichi.co.jp/article/594110〉でも公開されている。